



○「作家の手紙」..... 1	○「競輪川柳」入賞作品..... 5
○企画展「生涯100年記念 伊馬春部展 一向三軒両廻りの時代」..... 2	○企画展「森鷗外が支援した夭折の天才発明家・矢頭良一展」6
○岡野弘彦さん講演会「伊馬春部の文学と人生」..... 3	○企画展「響き合う 詩誌「たむたむ」展 — 107号のあゆみ 詩と出会って—
○ラジオドラマ脚本「屏風の女」を読む..... 3	○詩誌「たむたむ」主催 記念講演・朗読会
○文学講座..... 3	○対談「自分史を語ろう」..... 7
○文学館開館2周年・市制45周年記念事業..... 4	○岩橋邦枝・柴田翔講演会
○「杉田久女の世界を語る」..... 4	○自分史文学賞受賞作品決まる..... 8
○「杉田久女～その生涯と俳句」..... 4	○自分史ギャラリー展示替えのお知らせ
○企画展「バンクの風—小倉から始まった競輪とロマン」..... 5	○予告
○小沢昭一さん講演会&映画「競輪上人行状記」上映会..... 5	○資料寄贈者・提供者・受贈雑誌一覧
○白川道さん・佐木隆三対談「競輪と文学」..... 5	

# 作家の手紙

館長 佐木 隆三

昔は原稿の依頼状も手紙で、返信用のがきで応答するのが普通だったが、今はパソコンのメールが多くなり、編集者と一度も顔を合わさずに仕事を済ませたりする。そういう時代だから、「作家の手紙」は少なくなる一方だろう。

わたしが編集者に書いた手紙は、送った原稿がどうなっているのか催促したり、原稿料の前借りを懇願する内容だから、保存されていないことを祈るしかない。先輩からの戒めは、「間違っても恋文は送ってはならぬ」で、これは守ったから安心している。

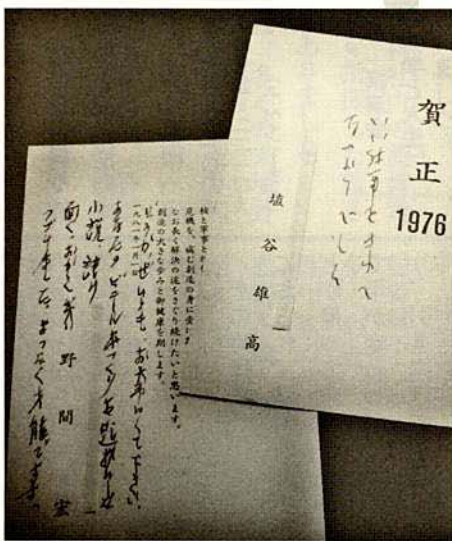
作家から頂戴した手紙（はがき）は、わたしの場合は年賀状・自著の献本への礼状などである。壇谷雄高さんの「賀正1976」に「いい仕事をしてなによりで

した」と添え書きがあり、前年十一月に「復讐するは我にあり」を送ったからだ。同年の井上ひさし夫妻の賀状には「佐木さんが直木賞をとると主人がいつづけています。すごくうれいす」と奥さんが書き、その通りになったからありがたい。

野間宏さんの一九八一年の賀状に、「あなたのビニール本づくりを題材にした小説を読み、面白くおかしく、笑いつづけました。

まったく才能ですよ」とあるのは、小説雑誌に書いた中編「セクシーギャルズ」を指している。生活のために中年の編集者が、若い女性のヌードを撮る苦労話で、ひたすらおだてるしかないという。

この小説が掲載された直後に、ある都市の教育委員会から「お願いしておりました講演と断りの電話が入った。むろんこれは、「こんな不謹慎な小説を書く作家の講演など教育上よろしくない」との判断からだ。小学生だった娘も、新聞広告を見た同級生から嘲笑されたとのことで、すっかり意気消沈した。そんなときに野間さんから「まったく才能ですよ」と評され、まさに複雑な心境だった。



## 第五回特別企画展

「生きた、書いた、愛した  
女性作家の手紙展」

宇野千代、野上弥生子、宮本百合子など女性作家二十五名が、それぞれの胸のうちを明かした直筆書簡を紹介します。文学への情熱、喜びと苦悩など、女性が社会と関わり、自己を表現しようとした軌跡を展観。柳原白蓮ほか、ゆかりの作家資料も展示します。  
\*会期 4月25日(土)～7月5日(日) ※月曜日休館  
(ただし5月4日は開館、7日は休館)  
\*観覧料 一般四〇〇円、中学生二〇〇円、小学生一〇〇円



昭和14年 吉屋信子邸にて  
左から林芙美子、宇野千代、  
吉屋信子、佐多稲子。